



“岐阜大好き”な秋元さんが 「やっぱ岐阜やて!」と言いたくなる理由 挑戦する若者と応援する大人がいる街のチカラ

OKB総研 委嘱コンサルタント

河合 達郎 氏 (一般社団法人 ^{やまなび}山学 代表理事)



あきもと しょうじ
秋元 祥治 氏

武蔵野大学アントレプレナーシップ学部教授
株式会社やろまい 代表取締役
NPO法人G-net理事(創業者)

1979年、岐阜市出身。早稲田大学政治経済学部にて在学中の2001年、起業家人材育成と地方創生をテーマにG-netを創業。2013年、「売上アップ」に焦点を当てた岡崎市の公的産業支援機関「オカビズ」のセンター長に就任し、開設から12年で累計約2万9千件・4,400社の経営相談を行う。2023年5月より、岐阜新聞の公式YouTubeチャンネルで、岐阜の魅力を考える番組「やっぱ岐阜やて!」シリーズを配信中。著書に「自分だからできる仕事のつくり方」(2025年、ダイヤモンド社)ほか。

若者の転出超過が続く岐阜県。4割を超える若年女性が岐阜に「住みたくない」と答えたというさみしい結果が明らかになったアンケート(岐阜県人口問題研究会、調査期間2024年7~9月)もあり、本レポートではこれまで、現役大学生との座談会を開いて、岐阜という地域の魅力について考えてきた(詳細は「OKB REPORT Vol.198」)。そんな中で、「やっぱ岐阜やて!」と力強く岐阜愛を叫ぶ人に出会った。岐阜市出身で、武蔵野大学で起業家の育成を目的としたアントレプレナーシップ学部の教授をしている秋元祥治さんだ。大学在学中から岐阜を盛り上げる活動を始め、20年超にわたって地域づくりや中小企業支援に携わってきた。「岐阜大好き」を公言する秋元さんに、岐阜の魅力と今後の可能性について語ってもらった。

大学生の活動を 本気で後押しした大人たち

——「岐阜大好き」「やっぱ岐阜やて!」と推している秋元さんですが、岐阜の魅力は何でしょうか?

秋元「山紫水明で美しい自然、日本の中央に位置して産業が豊か……、というのがおそらくベタなところですね。もちろんそれはそうなのですが、私にとっての岐阜の魅力は、挑戦する若者を本気で応援してくれるかっこいい大人がいっぱいいるということなんです。

岐阜を盛り上げようと、私がG-netという団体を立ち上げたのは21歳のころです。東京・新宿で下宿をする

早稲田大学のいち学生でした。ただの若者、何者でもなかった私を、『いいじゃん、頑張れよ!』と言って、その当時たくさんの方々から応援してくださった。そういう大人たちの存在が、私にとっての最大の岐阜の魅力です」

——どんな大人たちが秋元さんを応援してくれたのですか?

秋元「この活動は最初、半年の期間限定のつもりで始めたんです。4~5回だけ若者向けにトークライブをやって、みんなのテンションが上がったら『あとはよろしく!』って東京に戻ろうと思っていたんです。

ところが始めてみたら、『一緒にやろうぜ!』と言ってくれる仲間がたくさん集まってくれた。2001年末に、JR

岐阜駅のアクティブGを貸し切って年越しカウントダウンイベントをやろうということになったんです。

大学生の運営する団体ですから、信用ありません。大学生のサークルと変わりません。施設を借りるのも大変でした。そんな中、個人的なついでで協力をお願いした岐阜市の幹部の方が力を貸してくれました。何かトラブルがあった時の連帯保証の印鑑を押してくれ、イベント当日も日付が変わるまで会場の後ろで見守ってくれていました。午前0時を過ぎたら、『何もトラブルがなくてよかったわね!』と言って、家へ帰っていかれたんですよ。

さらに、そんな活動をおもしろがっ

てくれる岐阜新聞の記者さんがいました。年末の記者コラムで、『21世紀の最先端のような若者に会った』と。名前までは書いていないんですが、私のことですよね。『こういう若者の未来を見てみたい』とも書いてくれ、年明けの新年特集記事でも大きく取り上げてくれました。

すると今度は、これを見たある銀行関係者の方から、『おもしろそうだから会いたい』って電話がかかってきたんです。こちらもよくわからないまま訪問してみると、銀行の支店長さんだけでなく、県内の有力企業の幹部の方々まで紹介していただきました。活動を始めた経緯をプレゼンすると、集まった大人たちが『何かよくわかんないけど、応援してやろう』というような感じになりました。

これが活動を始めて最初の半年間です。半年でやめる気だったんですが、こんなに応援してくれる人たちがいたら、もうやめられないじゃないですか。

冷静に考えたら大ごとですよ。『よかったわね』なんて軽く言っていた岐阜市の幹部の方から始まり、団体の活動を書してくれた記者さん、その記事を見て連絡をくれた銀行関

係者の方、きっとよくわからないままに応援しようと言ってくれた企業の方々…。みなさん大恩人です。

こんなにありがたいことはありません。時代に合わない表現ですが、『こんなに応援してもらいながらやめたら男が廃る』と思いました」

鬼ごっこをしていた柳ヶ瀬が変わってしまった

——そもそも、岐阜での活動を始めたきっかけは？

秋元 「2000年だったかな。夏休みに帰ってきたら、近鉄百貨店がなくなっていたんですね。私は岐阜市立明徳小学校（現・明郷小）の出身なので、柳ヶ瀬商店街は地元です。子どものころは、柳ヶ瀬で鬼ごっこをしていました。

柳ヶ瀬から近鉄百貨店がなくなっていて、ショックでした。商店街にはアーケードがあって、ビルが建っているから、商店街の中からは空って見えないじゃないですか。子どものころは見えなかった空が見えるという、その光景がショックでした。

近所の知り合いの商店主の方々に聞いてまわったんです。『何でなくなっちゃったんですか?』って。聞こえてき

たのは『アーケードが古いのがいかに』『駐車場がないで…』『役所は何もしとらん』という声でした。当時それを聞いて、腹が立ってきたんです。『この人たち、なんで自分の町の話なのに、人のせいにはばかりしとんやろうな』と。

東京で知り合った岐阜出身の先輩に、平野彰秀さん（郡上市・石徹白で地域づくりに従事）がいました。平野さんに『みんな文句ばかり。だからダメなんですよ』って話をしたんです。しかし、平野さんとの対話で気づいたんです。『文句ばかり言っている人たちの文句しか言っていない私もまた一緒だ』と。

ふと思い出したのが、当時慶応大学の助教授で、大変お世話になっていた鈴木寛さんの言葉でした。『うだうだ言って何もしない人たちよりも、うだうだ言われながらも、何かしている人たちがずっとずっと偉い』。これは今でも私の座右の銘です。

私も何もしない人たちの一人なんだと気づいたんですね。ただし、当時の私は地元に戻らず東京で仕事をするつもりでした。それで、鈴木助教授に相談に行きました。『何もしない一人だと気づいたけど、地元のために何か始めたらやめられない気がします。どう思いますか?』。そう尋ねたら、鈴木さんの答えは『半年の期間限定でいいんじゃないか』というものでした。『続けたくなったら続けたいいい。半年でやめると言って始めれば、半年でやめても全然問題ないだろう』と。

その答えに納得して、『期間限定でやろう』と動き出しました。それが20年以上たった今でも続いているとは思っていませんでしたが」



2002～2003年のカウントダウンイベントで話す秋元氏（秋元氏提供）



2002～2003年のカウントダウンイベントGIFTの様子（秋元氏提供）

経営難に直面、 大人たちはここでも……

——活動は順調だったのですか？

秋元「G-netを始めて6～7年目の時、経営危機を迎えたことがありました。最初はイベントやフリーペーパーの発行をメインにしていたのですが、『もっと地域をよくするためには』という問題意識から、地域の仕事にフォーカスする事業へとシフトしていった時期です。長期実践型インターンシップや、中小企業経営者の右腕になるような人材育成や採用支援ということに挑戦し始めたんです。

その結果、既存事業も新規事業も、どちらも中途半端になってしまいました。もう大赤字です。金融機関はお金を貸してくれない、資金繰りもできない。26歳でそんな状況に陥りました。

自分の給料を会社に貸し付けて資金繰りしたり、消費者金融をまわったりもしました。親に頭を下げ、500万円借りて当座の資金を手当てしましたが、数か月もしたら終わり。『これはもうダメだな』とあきらめようと思ったんです。とりあえず、お世話になっている経営者の人たちにお金を借りて清算しようと思いました。数人から何とか300万円ずつ借りて、あとは自分が10年働いて返せばいいと。

お願いに行った1件目で、こう言われたんです。『なんでもっと早く言わないんだ。そもそもさ、貸してくれなんて水臭いこと言うな。100万くらいなら寄付するから頑張ろうぜ』って。

またある人には、300万円をお願いしたら『本当はいくらいるんだ？』って聞かれました。『できれば500万円も

あれば……』と正直に窮状を伝えました。2週間後に呼ばれて社長室に行ったら、何だか焼き芋でも入っているような茶色い袋が置いてあって、中を見たら500万円が入っていたんです。『お前のことを信じて貸す。借書なんかいらない。返せるようになったら返してくれたらいい』とまで言ってくれました。

こうした応援のおかげで、その後事業を立て直すことができました。本当に節目節目で後押ししてくれる大人たちがいたからこそ、今の自分があると思っています」

「岐阜は保守的だ」は言い訳

——挑戦を後押ししてくれる大人の存在という魅力は、挑戦してみないと感じにくいかもしれません。岐阜を離れていく若年層には、こうした魅力が伝わり切っていないのでしょうか？

秋元「挑戦する若者に目をかけ応援する大人たちは間違いなくいます。そして、挑戦する若者もいます。課題なのは、そうした大人も若者の挑戦も、十分に『見える化』されていないということではないでしょうか。

実は、私は現状を非常にポジティブにとらえています。昨今の岐阜県では20～40代の挑戦が目立つようになってきています。郡上の地域づくりや自然体験活動だって、飛騨古川の観光だって、瑞浪の醸造所だって、どんどん挑戦する若い人たちが生まれてきている。30代が主導する、

みんなで大学を作ろうという動きは、2026年春にCoIU（コー・イノベーション大学、岐阜県飛騨市）という形で結実します。政治の分野でも、当時全国最年少の20代市長が生まれた県です。若いリーダーがどんどん出ている。

『岐阜は保守的だ』って言われますけど、決して保守的ではありません。保守的っていう言葉を、岐阜から若者たちが流出している現状の言い訳でしか使っていないんです。今、挑戦というステージに若者たちが集まりつつあります。だから岐阜が選ばれる街になるキーワードの一つは『見える化』だと思います」

——どうすればそれがより「見える化」されますか？

秋元「若手の挑戦にフォーカスしてメディアやウェブで積極的に発信していくのはもちろんあるでしょうし、実は私、ずっとやりたいと思っていることがあって。それは『若者応援助成金』です。

例えば、共感する人を10人募って10万円ずつ出し合うと100万円ができます。毎年100万円を集めて、地元で新しいことに挑戦したいっていう若者たちに助成する仕組みです。3人で30万円集めたとしても、もう立派な助成



インターンシップフェア2005の様子（秋元氏提供）

金になるでしょう。別に、財団や大きな組織でなければ、助成金はできないというものでもありません。お金に加えて、賛同者それぞれの得意分野で挑戦をサポートすることだってできます。

こうした形でバックアップすることで、若者の挑戦が注目され、『見える化』される機会ができます。また、バックアップする大人の存在も『見える化』されます」

——ただ魅力に感じないだけでなく、「住みたくない」とまで若年層がネガティブにとらえてしまっている、その要因をどう感じますか？

秋元「保守的で旧来の価値観の押し付けがいまだにあるからだと思います。それを嫌う女性を中心に、若者が岐阜を離れているのです。選ばれる街になるキーワードをもう一つ挙げるならば、『見える化』に加えて、『ダイバーシティ』だと思っています。これは、岐阜県人口問題研究会も提起している課題です。

リチャード・フロリダというトロント大学の学者が、もう20年ほど前にクリエ

イティブ・クラスの研究をしました。クリエイティブ・クラスとは、起業家やアーティスト、商売を始める人など新しいものを生み出す人のことです。そうした人たちがどこに住むかということを、リチャードは研究したのです。

大雑把に言えば、そこはアメリカなら東海岸ではなくて西海岸でした。起業家やスタートアップがいっぱい生まれている地域です。研究によると、多様性や社会的な寛容性の高さがポイントだということです。

彼は寛容性をボヘミアン指数という、人口に占める作家やデザイナーなど芸術に関わる人の割合を示す指数で説明しました。例えばそれは、LGBTQや美術館、発表を表現するような場所の多さだと。つまり多様で、人と違うこと、ちょっと新しいビジネスを生み出そうということへの許容度です。

地域としてこの寛容性を持てるかが重要です。岐阜が今、多くの若年層に選ばれていないのだとするならば、現状ではここが欠けていると受け止めるべきでしょう。

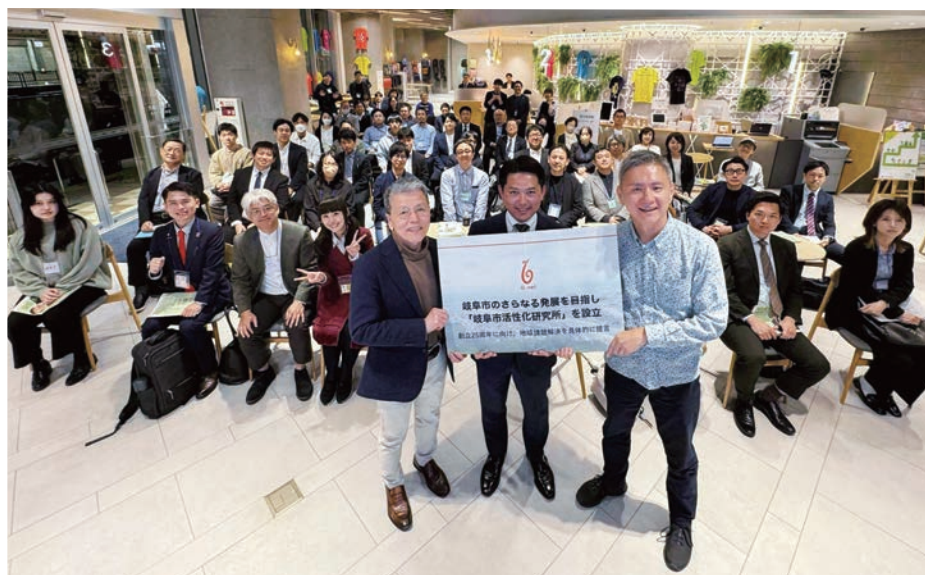
挑戦を応援する大人たちの存在。挑戦しようとしている人たちにスポットライトを当て、『見える化』すること。そして、多様性を受け入れ、寛容であり続ける、すなわち失敗を許容すること。こうした3点が、岐阜がこれからより多くの若い人たちに選ばれる街になるために大事ではないかと思っています」

自分たちでできることは いっぱいある

——現在、秋元さんは岐阜でどのような活動をされていますか？

秋元「岐阜市をよりよくすることを目的に、2025年4月、G-netにおいて『岐阜市活性化研究所』を設立し、所長に就きました。毎月1回、地域課題に精通した専門家・リーダーを招き、市民のみなさんと一緒に勉強する場を設けています。初回の4月には、岐阜市の柴橋正直市長をゲストに招き、市の現状と課題を議論しました。

また、美濃加茂市の藤井浩人市長らと立ち上げた『岐阜塾』も動いて



岐阜市活性化研究所 (秋元氏提供)



岐阜塾 (秋元氏提供)

います。県内の20～30代を対象にした、政治・ビジネス・NPOなどさまざまな分野におけるリーダー養成塾です。2023年にスタートし、次回来春の第4クールに向けて準備中です。

私自身に取り組む若い世代への応援であり、背中を押す大人の『見える化』であり、岐阜への恩返しでもあります。肩書こそ『武蔵野大学教授』と言われますが、私自身の認識ではもう岐阜の人です。

私以外にも、西濃地域に拠点を置く民間企業や行政などが中心となった『ミナモ会』という組織が、12月に『ギフコンバレー2025』というピッチイベントの開催を計画しています。ここにも、若い人たちを後押ししようという空気が見られますよね。

このイベントは岐阜で挑戦する意欲のあるスタートアップ企業が岐阜を活かしたビジネスモデルやアイデアをプレゼンします。最優秀のグランプリには賞金500万円、しかもイベント後、岐阜県内に登記して本当に事業を始めるのなら2倍の1,000万円になるという、非常に大きな魅力あるコンテストです。

このコンテスト、さらに素晴らしいのがプレゼンの審査員です。秋元ですか？ いえ、違います。岐阜の高校生・大学生たちが最終の審査員を務めるのです。これは新しいし、おもしろい。

私を含め30～40代のみなさんは、一人ひとりがプレーヤーであると同時に、次世代を応援する大人側にもなりつつあるわけです。いつの間にか私は、大学生で活動を始めた時に応援してもらったあの大人たちと同じ年になってしまいました。

つい私たちは、何事においても、大きな企業じゃなきゃできない、行政じゃなきゃできないって依存してしまいがちです。ですが、自分たちでできることはいっぱいある。若い人たちに、挑戦を後押しする大人たちの存在を見せていくというのは大事だなと思うし、私自身も挑戦していきたいと思っています」

インタビューを終えて

岐阜推しの秋元さんが感じる魅力は、「若者の挑戦を本気で後押しするカッコいい大人たち」。この一言を聞いて、冒頭で触れた大学生たちとの座談会を思い出した。まさに一人の学生が、岐阜をあきらめない、どうすれば魅力をもっとアピールできるかを真剣に考える大人たちに出会ったことを、岐阜の魅力に挙げていたからだ。

秋元さんやこの大学生の声を、私は「前向きな空気感」ととらえた。そうした雰囲気があれば、挑戦しやすい。逆に「どうせうまくいかない」というような雰囲気なら、ブレーキがかかる。私自身も中山間地域という小さなコミュニティで活動しながら、明るく押し上げてくれる地域の方々のありがたみをひしひしと感じる。

地域の雰囲気を作っているのは、まぎれもなく、ここに住む私たち一人ひとりであるということを忘れてはならない。秋元さんは「やっぱ岐阜やて!」のTシャツをまとい、文字通り体を張って前向きな雰囲気を醸成しようとしている。その空気感が若者を引き寄せ、挑戦が次の挑戦を呼ぶ、そんなプラスのサイクルを生んでいくのではないだろうか。



一般社団法人 山学 代表理事
河合 達郎 氏

1987年5月3日 岐阜市生まれ
2006年3月 岐阜県立岐阜北高等学校 卒業
2010年3月 立命館大学国際関係学部 卒業

職歴

- 株式会社朝日新聞社(2010年4月～2021年3月)
- 岐阜県本巣市地域おこし協力隊(2021年4月～2024年3月)
- フリーライター、編集者(2021年4月～現在)
2024年3月より、朝日新聞岐阜県版でコラム「無人駅から」連載中。
- tete. (2023年5月～現在)
いちじくの栽培／加工／販売
- 一般社団法人 山学 代表理事(2024年3月～現在)
学習支援／地域食堂／自然体験
ローカル線・樽見鉄道の無人駅で開く学習支援の継続に向け法人化。本巣市内の30代3人で設立。中山間地の子どもの焦点を当てた活動を展開する。



山学レポート



いちじく農園「tete.」の
ホームページ



いちじく農園「tete.」の
Instagram

※インタビューは、2025年10月16日に実施。発言者名は敬称略。